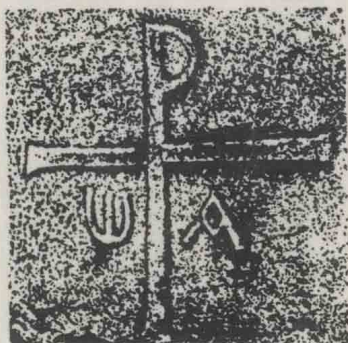


主の山上のことば

アウグスティヌス 熊谷賢二訳

キリスト教古典叢書 8



上智大学神学部編  
P. ネメシエギ責任編集  
創文社刊

# 主の山上のことば

アウグスティヌス  
熊谷賢二訳

上智大学神学部編  
P.ネメシエギ責任編集  
創文社刊

主の山上のことば〔キリスト教古典叢書8〕

1970年6月20日 第1刷発行

ISBN4-423-39208-9

1993年5月30日 第3刷発行

編集者 上智大学神学部  
編集責任者 P・ネメシエギ  
訳者 熊谷賢二  
発行者 久保井浩俊

定価 3605 円 (本体 3500 円)

発行所 株式会社 創文社

本社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

暁印刷・鈴木製本

## 緒言

アウグスティヌスが長い心の戦いのすえ、ミラノでアンブロシウスの手から洗礼を受けたのは、三八七年の春であった。洗礼後アウグスティヌスは一年ほどローマで待機し、そこで種々の書物——『カトリック教会の道徳』（キリスト教古典叢書第二巻）もその一つである——を物し、ついに友人とともに国境のアフリカのタガテスにもどり、そこでかれらとともに学究と祈りにささげた日々を過ごした。しかし三九一年にアウグスティヌスはたまにヒッポの教会を訪れた時、その信者たちの要望に従ってワレリウス司教からその教会の司祭に叙階された。この司祭叙階はアウグスティヌスの生涯に新しい時期を開いたものである。それまで主として哲学に興味を持っていたアウグスティヌスは、これを契機に聖書学、神学、説教等に力を傾注し、神の民に奉仕する司祭、司教としての活動に従事するようになった。そうしたアウグスティヌスの働きの最初の実の一つが、ここに訳出された『山上のことば』の解釈書である。それがいつ著わされたかについては、アウグスティヌスが晩年になって書いた『諸本の改訂』から手がかりを得ることができる。アウグステ

イエスはその書物の十九章において、三九三年にヒッポ教会会議で行なった自分の説教に触れた後、著作 *De Genesi ad Litteram* に言及し、続いて「同じ時にわたしはマタイによる主の山上のことばについての二巻を書いた」と述べている。したがって、本書が書かれたのは、およそ三九三年から三九六年の間で、当時、アウグスティヌスの年齢は約四十歳と推定される。

### 山上の説教の解釈の問題

イエスの山上の説教に対してアウグスティヌスが何よりも深い興味を持っていたのは当然なことである。マタイ福音書の五章から七章にかけての説教は、キリストの教えの真髓を表わすもので、各時代のキリスト者たちに深い感銘をもたらし続けている。この説教を通して、イエスの魅力的で崇高な姿、かれの純粹さと新しさが輝きいで、山上の説教とそれを述べるイエスは、まさに火のような姿で迫ってくる。それは人を魅了し暖めると同時に、また人を焼き尽くすほどの熱烈さをも帯びている。

キリスト者が常に山上の説教を愛読しているのは確かであるが、その正確な意味を見いだすのは決して容易なことではない。実際、山上の説教の根本的意図に関してさえ、解釈者たちは種々さまざまの見解をとっている。

**律法的解釈**　ある解釈者によると、山上の説教は本質的にモーセの律法と同じ性質のものでありながら、いっそう深い、いっそう崇高な道徳を説いており、律法の真の意図を徹底させるもので、そうあるべきだという崇高な規範を人に示し、人を努力へとかりたてるものである。

しかしこうした解釈を生活に移そうとするとき、たちまち種々の困難に突き当たってしまう。山上の説教でイエスが述べているままにふるまうことは、実際上人間にとって可能なことであろうか。人間の力はそれに及ぶものであろうか。山上の説教の原則に従って社会生活を営もうと試みるならば、その社会は混乱してしまうのではなからうか。山上の説教に一度でも目を通した人であれば、確かにこう感ぜざるをえないであろう。

**完徳の特別な基準としての解釈**　そこである解釈者は、山上の説教はキリスト者全般のためのものではなく、特定のキリスト者のグループ、「完全なキリスト者」、たとえば修道者だけにあてはまる特別な律法と解そうとした。しかし、そのような解釈もイエスの意図に合致しないようである。山上の説教は明らかにイエスのすべての弟子に課せられたおきてなのである。

## 宗教改革者の解釈

こうした困難からルターや他の宗教改革者たちの解釈が生まれた。ルターによると、山上の説教を述べたイエスは「モーセよりもモーセである」。すなわち、イエスの示している律法は、モーセの律法よりも人間にはどうしても実現できない崇高な要求、しかもすべての人に課せられたきびしい要求を示すものである。人間はこのような要求に直面して自分の無力を思い知らされたとき失望せざるをえない。しかし、パウロがローマ書とガラテア書で書いているように、神の要求に直面してそれを果たすことができないのを経験したとき、人は、自分が罪人であることを認め、唯一の眞の義人であるイエスに信頼し、神のゆるしを請う。こうした人は、山上の説教に述べられている教えをけつして果たしえないとしても、イエスを信ずる者としてイエスの義のゆえに神から義人と認められるのである。

山上の説教に関するルターの解釈は以上のようなものであるが、現代聖書解釈者たちが一様に認めているとおり、この解釈は、パウロ神学の解釈としての是非はさておき、イエスの山上の説教の解釈としては受け入れがたいものである。実際、山上の説教に目を通してみると、その意図するところが、人に自分の無力を思い知らせるだけにあるという印象をけつして受けない。かえって、イエスは神の国の義の要求を述べ、その義になつた生

活を弟子たちに命じ、それを実行しない人を神の国から排除するのである。

**終末論的解釈**　　そこでいわゆる終末論学派に属する聖書学者たちは、山上の説教の他の解釈を試みたのである。かれらによると、イエスは、まもなく訪れる世の終わりを期待した人であり、山上の説教は、このさし迫った世の終わりまでの短日月のための生き方を示すものにすぎない。世の終わる直前の危機にそなえた道徳としては山上の説教のそれは当てはまるが、数世紀にわたって続く長い時間にそれをそのまま当てはめることはできない。

しかし、こうした終末論的解釈も納得のいくものではない。一方、キリスト者たちはイエスの教えの本質がイエスの誤解に基づくものであるとはけっして認めないであろうし、山上の説教が自分たちにとって生活の規範とはならないとも認めないであろう。他方、山上の説教そのものに見られるイエスの静穏さも、さし迫った世の終わりをまのあたりにした狂信家たちの調子とはまったく異なっている。

### 様式史的解釈

それではいったい、山上の説教はどのような意味にとるべきであろう



か。

ここにおいて現代聖書学の進歩は、新しい光をもたらした。特に福音書に関する「様式的」研究の成果を集め、それに基づいて山上の説教を解明した力作として、J・エレミアスの『山上の説教』という研究が世に出た(Joachim Jeremias, *Die Bergpredigt*, Stuttgart, 1959, 邦訳、エレミアス著『新約聖書の中心的使信』川村輝典訳・新教出版社・一九六六年七五―一二二ページ)。この著作の中で著者は、次の点を明らかにしている。すなわち、山上の説教は、もともと、マタイ福音書に載せられているままの形でイエスが続けて述べた、一つの説教ではなかったのである。マタイ福音書をマルコ、ルカのそれと比べてみると、マタイがまとめ上げたこの説教は、他の福音書では散見されることがわかる。イエスがおりに述べた種々の短いことばを一つの長い説教にまとめ上げ福音書の冒頭を飾ったのは、ほかならぬマタイ福音書の著者(あるいは、その著者がもとにした資料の作成者)であった。マタイ福音書には、山上の説教のほかに、さらに四つのイエスの説教が載せられているが、そのいずれもがこうした集録である。

山上の説教においてマタイは、イエスを、新しい法を述べるモーセとして示そうとし、山上で新しいおきてを説くイエスを、シナイ山のふもとで神の法を説いたモーセに対照さ

せて描写している。しかし実際にイエスはその説教活動を、山上の説教のような道徳上の要求を述べることから始めたのではなかった。エレミアスが正しく言っているとおり「先に来る何かがあった」（二一ページ）。その何かは神の国の到来に關するイエスの告知にほかならなかつた。「神の国は近づいた。改心せよ。福音を信ぜよ。」これがイエスの最初の呼びかけであつた。神の国がやって来た。すなわち、神の支配、神の恵み、神の愛がこの世の中に入って来た。イエスの到来とともに、世に救いをもたらす神の恵みの時代が開かれたのである。イエスのことば、イエスのわざによって、惡の支配が破壊され神の支配が始まることが明らかにされたのである。イエスにおいて訪れた神の国の到来を信ずる人は、慈悲深い神から罪をゆるされ、新しく生まれ変わった神の子として神の国へ入ることが許されるのである。

山上の説教は、いわば第二段階の教え、すなわち、神の国の福音を信じ、神の恵みを経験した神の子らが持つべき新しい態度を述べているものである。そのような新しい態度は、單なる道徳上の努力によって得られるのではなく、神と人格的に出会い、罪のゆるしを得て感謝にあふれる人の心からわき出る新しい生き方なのである。

初代教会も山上の説教をこの意味で伝えた。それは最初の福音宣教（ケリグマ）に属する

ものではなく、すでにキリスト者となった人の教育段階に属する教訓として伝えられたのである。キリスト者たちは、まずキリストの死と復活という救いの現実、聖霊が与えられるという救いの現実を、教えられ経験しなければならなかった。そこで罪のゆるしを得、復活したキリストと結ばれ、神の子らとして新たに生まれた後に、神の子らとしての生活の模範としてキリストのことばとキリストの姿を教えられたのである。山上の説教は、キリストによってつかわされた聖霊に動かされている人々のために生活の規範を示すものである。エレミアスが適切にも述べているように、それは「律法ではなく福音である」(二九ページ)。

こうした現代聖書学者たちの解釈は、山上の説教の本来の意図を最もよく表わしているものと思う。

**アウグスティヌスの解釈**　そこでアウグスティヌスの解釈は以上述べた種々の解釈のどれに属するであろうか。もちろん、アウグスティヌスは、現代聖書学者たちの研究の成果については何も知るはずがなかった。かれは福音書の「様式的な研究」は決して行なわなかった。かれは、マタイ福音書に書いてあるままの説教をイエスが一つの体系的なもの

として述べ、キリスト者の道德生活の完全な規範として示したものと信じていた。そしてこれは人が単に関心をもつて遠くからながめるといったような理想を示すものではなく、人が実行しなければならぬものであると確信していたのである。それでは、アウグスティヌスの解釈は、山上の説教を道德規範としてとる律法主義的な解釈であろうか。そう結論するのはあまりにも早計である。

アウグスティヌスの解釈をもっと入念に研究してみると、かれの解釈はけっして単純なものではないということに気づく。その解釈方法は、たしかに、現代の聖書学のそれとは相当な隔たりが感ぜられ、現代人にとっては認めがたい点も多いが、その解釈の結果アウグスティヌスの引き出す結論は、人を驚かせるほど正しいものである。

### 七という数字

まず、山上の説教についてのアウグスティヌスの解釈の根本的な枠を探求してみよう。アウグスティヌスは七という数字を説教の解釈の一つのかぎとして用いている。説教の冒頭に八回現われる「幸いなるかな」ということばで始まるイエスの句があるが、アウグスティヌスはその八番目のものは第一のものくり返しであるとし、それを七つのことばとみなしている。そしてこの七つのことばによって、完徳に至らせる七つ

の段階が述べられていると言っている。

さらにアウグスティヌスは、そのあとに続く説教全体に述べられているおきてを、この七つの段階を具体化したものとしてとる。すなわちかれは次のように説明している。マタイ福音書五章二一から二四節までは、心の貧しい人、すなわちけんそんな人のことが説明されている。二五、二六節には柔和な人について述べられ、二七、二八節に悲しむ人のことが説明されている。五章二九から三七節までに述べられているキリストのおきては義に飢えかわく人のことであり、続く三八から四八節まではあわれみ深い人のことが述べられている。六章の一節から七章の一二節までの最も長い部分は、心の清めに関する教訓である。最後に七章一三から二三節までは平和な人のことが述べられている。

アウグスティヌスはまた主の祈りの七つの祈願をもこの七つの段階に結びつけ、祈願の一つずつを七つの段階の一つずつに当てはめている。

さらにアウグスティヌスは、キリスト者の道徳生活全般を包含するこの七つの段階を、イザヤ預言書一一章の二節に述べられている聖霊の七つのたまものと関係づけている。イザヤ書の原文には、来たるべき救い主の上に下る神の霊のことが次のように書き述べられている。

「その上に主の霊がとどまる。」

それは知恵と悟りの霊、

深慮と才能の霊、

主を知る知識と主を畏れる霊である。」

原文には、以上のように、霊の六つのたまものが述べられているが、七十人ギリシア語訳およびラテン語訳の聖書には、「主を畏れる」ということばが「敬虔」と「主への畏れ」との二つの表現に翻訳されている。こうして聖霊のたまものは七つになつていたのである。

古代から現代にかけて、キリスト教著作者たちは、イエスが受け、また、イエスを通してキリスト者たちにも与えられた、この聖霊の七つのたまものについてたびたび論じてきた。アウグスティヌスはこの七つのたまものを、「幸いなるかな」ということばで始まる句によって表わされた一つずつの完徳の段階に結びつけているが、順序は逆になっているのである。すなわち、第七のたまもの、主への畏れから始めている。心の貧しい人、すなわちけんそんな人は主を畏れるが、それこそ知恵の「始まり」である。キリスト者はそこから種々の段階を通り、ついには神の子らの完全な平和、すなわち真理である神と一致して知恵を享受することによって得られる完全な平和、天国の永遠の静けさという第七の段階

へと導かれるのである。

こうした解釈の方法は、現代人には非常に技巧的、人為的なものに感ぜられる。そしてたしかに、種々さまざまのうちに述べられたイエスのことばの集録である山上の説教を、こうした体系的なものとして解釈し、そこに述べられているおきてを、イザヤ書に述べられている聖霊のたまもの一つ一つと結びつけることは、正しいとはいえない。

しかし驚くべきことには、このように技巧的、人為的と見える解釈の結果、アウグステイヌスは山上の説教の真の意義を理解するために、きわめて重要な洞察に至るのである。

**聖霊のたまものとしての道徳**　すなわち、山上の説教に述べられている生き方は、人間が汗を流し努力して自力で歩むという道ではない。それは、キリストを通して神の霊である聖霊を受け、その聖霊のたまものに浴している神の子らの心からわき出る新しい生き方である。前に引用したエレミアスの「先に来る何かがあった」ということばで表わされた洞察を、アウグステイヌスはまったく別の方法で獲得したのである。その先に来るものは、ほかでもなく神の霊、聖霊のたまものである。キリストを信じ聖霊を受けている人々こそ神の子らの心に注がれた愛を持つようになるのである。人間はこの愛を持つことがで

きてはじめて、キリストのくびきを軽く感ずるであろう。そしてかれらの生活は生きた信仰から生ずる自発的な感謝の生涯に変わるのである。

### キリストの慈悲深い助言

しかし、これだけでは、山上の説教に述べられている高い理想の実現に困難を痛感している信者たちは、まだ納得しないであろう。そこで、聖霊のたまものうちの一つ——それは原文では深慮を意味しているが、アウグスティヌスは、ラテン語聖書訳に従ってそれを「助言」と理解したのである——についてのアウグスティヌスの解釈に特に耳を傾ける必要がある。この「助言」をアウグスティヌスは、「幸いなかなあわれみ深い人、その人はあわれみを受ける」というイエスのことばと結びつけ、また「われわれが人の負い目をゆるすように、われらの負い目をゆるしてください」という祈願と結びつけている。その助言とは、すなわち、常に自分の道徳上の至らなさを自覚させられる人が、他の人々の欠点や罪をゆるしながら自分の罪のゆるしを神に願い、立ちなおるための力を願うようにという助言なのである。一方で山上の説教に述べられているイエスのことばを実行する堅い決心をもっていなければならないが、他方、この実行はあくまでも不完全なものであって、神との完全な心の一致、また、その一致がもたらす平和



などは来世でしか実現されえないのである。そこで、もし人が、自分はイエスの要求に従いたいと望みながらもまだそれに完全に従っていないとわかったとき、かれに残された唯一の希望は、上に述べた主の助言に従うことである。すなわち、自分も神のゆるしを必要とするものであるから、心から他人をゆるし、自分もあわれみを受けたいので、他の人々をあわれむということである。このような慈悲深い助言を通して神は人間に恵みを保証しているのである。人間は常に罪人であるが、常に改心しつつある罪人であり、常に完全な愛をめざさなければならぬ。キリストの要求をひたむきに追求し、自分の至らなさを常に嘆き、そのゆるしを願い、自分もゆるされるために心から人をゆるす人、しかも常に完徳の進歩に励む人、これこそアウグスティヌスが、山上の説教を真摯に受けとめるキリスト者の姿として示すものである。

**主のことは絶対命令である**　以上の考察からアウグスティヌスの山上の説教に関する解釈がどれほど興味深いものであるかが容易に理解される。しかし解釈全体に対するアウグスティヌスの思想がすぐれているだけでなく、説教の個々の箇所に関するかれの解釈もきわめて価値高いものである。もちろん、時として現代の読者はアウグスティヌスの説